円盤と宇宙哲学の研究誌

日本ＧＡＰニューズレター

１９６５

３月・４月

日本ＧＡＰニューズレター

—１９６５—

3月・4月号目次　　通巻第27号

新しい地平線の彼方へ	Ｇ・アダムスキー	1
死と空間を超えて	Ｇ・アダムスキー	7
質疑応答	Ｇ・アダムスキー	19
生命の科学　（完）	Ｇ・アダムスキー	20
編集後記		32

新しい地平線の彼方へ

G・アダムスキー

私たちはクリスマスの休暇をとるためにメキシコ市へかつてないほどの楽しい旅行をしましたが、その際決して忘れることのできない体験をしました。それは十二月十七日の午後ティフアナ空港で始まりました。メキシコ市へ私たち一行を運ぶ旅客機はティフアナ空港着陸が二時間遅れたのですが、それは四基のエンジンのうち一基が作動しなかったためであることが判明しました。しかもそれを修理する必要があるために更に二時間遅れることになり、ついに四時間遅れて出発したのですけれども、これも一時間ばかり飛んだだけで、またも故障のためにティフアナへ引き返さねばならないという放送が機長から行なわれました。

暗黒が深まっていたときで、はるか下方に小さな光の集団が見えます。こうして或る地点にさしかかったとき、その光点が次第に増加してきて、それから判断しますと、どうも飛行機は同じ場所を旋回しているように思われました。この旋回は二十五分間続き、それから着陸するというアナウンスメントがありました。それは乱暴なひどい着陸でしたが、だれもケガすることなく、ともかく無事地上に降り立って乗客はホッとしていました。危険な場合はそうであるように、かつては互いに見知らぬ人間同志であった乗客一同はきわめて友好的になりました。

一同はティフアナのすてきなモテルへ案内され、翌日の正午までには再び機上の人となっていました。同じ旅客機が修理されたのですが、休暇の楽しい気分に満ちていたため心配する人はいませんでした。

グアダラハラの空港に着いたときは暮れていて、そこで二十分間の休憩がとれたので、乗客はみな軽い運動をするために外へ出て行きました。しかしその旅客機はもう飛ばないことがまもなくわかりました。二基のエンジンに無理があったからです。そこでメキシコ市へ行く乗客は空港で無料の食事が与えられ、別な飛行機が来るのを待つことになりました。

十八日の午後十時三十分に雷鳴とどろく激しい風雨の中を飛行機が到着しましたが、嵐が過ぎるまで離陸は延期されました。結局、くたびれたけれども安心した表情の一団の人々がメキシコ市の空港に降り立ったのは十二月十九日の朝一時でした。空港に出迎えに来た友人たちは事情を知りませんので、タクシーでホテルに着いてからそのイキサツを話しましたら、みなは私たちが無事に来たことをたいそう喜んでいました。

実はこれはブラザーズが私たちを助けてくれたのです。私たちは円盤を見かけませんでしたが、彼らは遠方からリモート・コントロールによって助けてくれたのでした。

私たちがメキシコにいたあいだ毎日多くの仕事で多忙をきわめましたが、多数の人が円盤・惑星人問題について知識を求めていることがわかりました。またブラザーズの計画を促進することに深い関心を持つきわめてすぐれた人々とも会いました。そのなかにはブラザーズのニューズを大衆に伝えるのに大きな勢力を持つ実力者もいます。その人たちがメキシコで政府要人と会談する計

画も討議されました。また或る人を通じてメキシコ市の大新聞社が時折惑星人問題に関する記事を掲載することを約束してくれました。

【メキシコ市における学園建設について】　私たちがメキシコ市に建設しようとしている学園のために提供された用地はブラザーズの目的に適していないことがわかりましたので、他の場所について検討されました。そのために尽力して下さる人々がいます。土地の提供について奉仕的な人々に私たちは心から感謝しています。

【ハンス・ペテルセン少佐の計画】　ハンスの共同社会建設計画については、私があまりに忙しいために私自身は接接手をくだしてはいません。しかしその土地選定にハンスに協力している一知人に会いました。この計画には政府との折衝その他の煩雑な手続きを要します。これは一種の小さな独立国に似た性格のものになるからです。それをうまくやるには技術上の青写真も必要としますが、これについては熟練者である私の一友人がハンスに協力方を申し出ています。

【ユカタン半島の探険計画】　読者の多くは例のユカタン探険に関する情報を望んでおられますが、目下確実なことは言えません。多くの可能性はありますので、よい報告が入り次第にお伝えしましょう。ブラザーズは彼らの地球来訪の目的を大衆に確認させる好機が今や来たと考えていますので、彼らの宇宙船をもっと多くのカラー映画に撮影する許可を与えてくれました。これは彼らの計画の一部ですから今年度の大部分は米国中でフィルムを公開することに費やされるでしょう。したがってヨーロッパへの講演旅行を延期しなければならないでしょうし、場合によってはユカタンの探険行も来年に変更されるかもしれません。しかし私たちの努力が実を結びつつあることを読者のすべてに喜んでいただけるものと確信します。近い将来世界中の人が無知から解放されて生命の目的を理解するでしょう。

【生命の科学講座について】　一九六四年一月に始まった〝生命の科学〟は今回第十二課をもって完結し、ブラザーズも私もその成果に満足しています。講座を研究してその知識を応用した人の大部分は自己の能力を著しく拡大しています。実際、多数の読者が奇跡的な物事を行なっています。このことは今後もずっとこの講座が大きな価値を持つことを示しています。宇宙の原理の研究と応用に終りはありません。これについて大いなる努力を払って下さったブラザーズに感謝してよいでしょう。これは私たちの精神生活ばかりでなく行なおうとするあらゆる物事にあてはまります。この講座の研究だけでもよき未来を建設するのに役立つでしょう。

これまで講演会でたびたび申しましたように、私たちに直接関係があるのは円盤の目撃ではなく、生活改善のためにブラザーズがもたらした知識です。目撃などというものはみな大同小異です。この知識なくしてはよき世界を期待することはできません。よき世界の建設こそ私たちの義務です。政府が私たちにかわってこれを行なうことはできませんし、また惑星人に関する情報それ自体がこれをやりはしません。情報と知識は実行されない限り価値はないからです。

ブラザーズは知識を伝えるのを次第にスピード・アップします

が、一方、それを無理矢理に大衆に認めさせようとはしません。彼らは自己の意志を他人に押しつけてはいけないという宇宙の法則に従っているからです。これは客にたいしてテーブルを据えることはできても、相手に食べさせたり、または相手にかわって食べてやることができないのと同様です。

一九六五年度の計画はすでにスタートしました。すべてが順調にゆくならば惑星人問題の周知に必要な情報が出されるでしょう。それは重要な情報です。米国は世界のリーダーであり、多数の国が米国を情報源としていますので、右の情報の提供はこの国にかかっています。

【ワシントン市の円盤出現事件】　一九六四年十二月二十九日以来、ワシントン市上空にたびたび円盤が出現しています。ワシントン記念碑の落成式より一週間前に、五機の円盤が白昼その上空を飛ぶのが見られました。軍関係者や民間人がそれを目撃しています。その翌日、私が数ヵ月前ワシントンの近くで撮影した円盤の記録映画の一部が公開されましたが、これは政府関係者に大きなショックを与えました。記念碑上空を飛んだ円盤と同じものであることが判明したからです。私がワシントンに着いたときフィルム類の公開が要求されるかもしれません。それらはすでに航空宇宙局の要人たちに見せてあるからです。一般人が映画撮影機で撮った円盤写真の殆どはそれが単なる光点にすぎず、通常昼だろうが夜だろうが撮影された円盤の輪郭はハッキリしません。これは円盤の放つフォースフィールドのためであって、一種のイオン化した雲であり、船体はその中に包まれています。内部の乗員はその〝雲〟を通して外部を見ることができますが、外部から船体をハッキリと見ることはできません。これは地球人の敵意に満ちた好奇心を抑制するために用いられるのであって、宇宙船の船体は雲に日光が反射するように白銀色またはその他の色を放っているように見えます。

そこで私の場合は円盤の輪郭をハッキリさせるためにこのフィールドを除き、明瞭な船体の見える写真を撮影させてくれたのです。これによって多数の観覧者がより大きな確信を持つことをブラザーズは期待しています。私のフィルムは固形の船体を示していて、単なる光点のすばやい飛行ぶりではありませんので、ワシントンにおいて多大の関心を呼び起こしました。こうした関心が本年末まで続くことを望んでやみません。ブラザーズは定期的にワシントン市上空に出現することを意図しています。真相が大衆に伝えられるまで必要とあらば大挙して飛来するかもしれません。

このフィルムの公開に熱心な関心を示されるグループにたいして私は協力を惜しみません。各地で公開すれば、これまで円盤を見たことのない人はそれを見る好機を与えられることになります。詳細は私のいるGAP本部宛に御照会下さい。

【惑星の問題について】　ジョン・ホプキンズ大学のジョン・ストロング博士によれば、マリナー二号の観測結果として公表された情報は虚偽のものであったことがわかります。ス博士の最近の発見によれば、金星を包む雲の上層部は氷片でできているということです。これは八万六千フィート上空に上げられた気球に装備された望遠鏡により観測した結果です。このデータはかつて出された情報―金星には水があり、雲の上層部の実際の表面温度はFマイナス四十度である―を裏書きすることになります。

（注。ジョン・ホプキンズ大学の天体物理学ティームは大気の影響を受けない二十五キロ上空へ気球を飛ばし、金星で反射された赤外線を測定した結果、金星の大気中の水蒸気は氷片でできているとストロング博士は推測した。水は水素と酸素で成るものであるから酸素も存在する可能性があるということになり、また表面温度も従来の説ほどに高くないので、生物生存の可能性が強いと博士は述べている）また私は月についても従来の説とは全く異なる状態であったことがいずれ判明すると思っています。それは私のかつての体験を証明することになるでしょう。

地球の科学者は宇宙空間で発生している多くの変化や活動について充分な知識を持ちませんので、科学者は正確な知識をつかむための完全な装置を作ることができません。また現在の装置類も宇宙の或る分野では役立っても他の分野ではダメというようなものばかりで、すべての状況を記録するように作られてはいません。たとえば地球を去ること六千万マイル彼方に起こる〝嵐〟を記録することのできる装置はありません。つい最近そうした〝嵐〟が発生して三機の宇宙船に損傷を与えました。人命に影響はありませんでしたが、そのうちの一機は修理のために月に着陸し、残る二機はかろうじて彼らの惑星へ帰り着きました。しかるに地球の観測装置は、カミナリのように宇宙空間に反響したそのすさまじい磁気嵐を記録しませんでした。地球人は各惑星を相互に結び付けている電磁気の力線について何も知っていません。この力線が交叉するとジェット気流どころではないはるかに強力なエネルギーが発生するのです。

大気圏外のこうした状況は周期的に発生し、ときにはその影響が地球に及ぶまでに一年もかかることがあります。それが地球に及ぶときは通常異常天候と呼んだりします。ゆえに地球人は宇宙に関してほとんど何も知らないことがわかるでしょう。科学者は宇宙空間は何の活動も行なわれていない無の世界であるという説を変える必要があります。大気圏外へ打ち出された観測機械のなかには軌道をはずれたのが多くありましたが、空間に力がないとすれば何がそうさせるのでしょう？　またなかには作動しなくなったのもあって、何らかの妨害があったことを示しました。だから科学者間には多くの意見の不一致があるのです。

惑星人はこうした宇宙空間内の状況をよく知っていますが、それでもなおかつ右のような〝嵐〟に遭遇することがあるのです。

太陽系では各惑星はみな相互に関係があり、他の惑星から影響を受けています。これは電波通信のシステムが太陽の黒点や爆発によって影響を受けるということでわかります。宇宙空間の電磁気的な変化が太陽系内の全惑星に影響を与えるのです。その激しい〝嵐〟は空間内に振動を起こしますが、これは〝空震〟と呼んでよいもので、カミナリみたいなものです。ブラザーズが語ってくれたところによりますと、ひどい電磁気の〝嵐〟は惑星上に地震を起こす〝引き金〟の役目をするということです。しかしこれは宇宙の活動によって起こる自然現象にすぎません。

【地震と予言】　近年になって地震に関する予言が流されて、人によってはその予言を惑星人と結び付けているのがあります。これは正しくありません。地震の歴史をみてもこんな説が誤っていることがわかります。過去にも大地震は何度かあったからです。現在のいわゆる大地震は、遠い昔に文明を破壊したほどの激烈な

ものに比較すればまだ微々たるものです。地球上では目下地震が以前よりも広範囲にわたって発生することは事実ですが、それはむしろよいことなのです。広範囲な地域にわたるほど地震を起こすエネルギーを弱めるからです。案じなければならないのは、そのエネルギーが一定の地域に集中するときです。現在たしかに各地で地震が起こりますけれども、過去の文明（注。アトランティスやミューなど）を破壊したほどの強烈な完全破壊にまでは至らないでしょう。しかるに人々のなかには生活を楽しむかわりに予言類の恐ろしさを誇りにしている人があります。

【貧困排除の戦いについて】　さてこれについて少しお話ししましょう。これは地球人にとって何を意味するでしょう？　常識のある人ならだれでもこの戦いの結果がどのようになるかはわかりますが、真の結果がわかるまでにはかなりの期間を要します。結局われわれは次のように言うことができます。「地球人は他の惑星に従ってこの社会の型を作り上げようとし始めている」惑星人は欠乏も貧困も知りません。ひとたびこの地球から貧困が除かれるならば、この文明は創造主が意図したとおりに生き始めることになるでしょう。この種の戦いはむしろ人類の覚醒剤となるかもしれません。それによって貧困が除かれれば多くの病気や犯罪が消滅するからです。貧困こそ多くの病気の原因です。人類が生活の必需品を充分に持てば、病気の原因である心配や緊張は消滅し、また犯罪の発生する余地もなくなります。

これを達成するためには物資の分配法が変えられねばなりませんし、平等の法則が貪欲の法則に置きかえられねばなりません。自然というものは、人間がそれに逆らわないでむしろそれと共に働くならば決して人間を堕落させはしません。今や自然は人間が利用し得る以上に多くの物を産出するからです。この世界には三十億の人間がいますが、やり方によっては混乱を起こすことなしに更にもう三十億の人間を住まわせることもできます。米国内だけでも居住地以上に多くの未開地がありますし、その大部分は水その他生活に必要な物資を産出する可能性があります。こんにち互いに殺し合うために使用されている金銭が未開地の開発に用いられるならば、まもなく地上に天国を実現せしめることになるでしょう。これが達成されるとき地球人は他の惑星人と同様に太陽系の一員となるでしょう。しかるに現在地球人は宇宙という源泉を求めて一大家族として結束するかわりに、あまりにも多くの〝イズム〟のもとに生きています。この〝イズム〟こそ欠乏と不幸の原因です。それこそ人類を分裂させるものであるからです。

しかし、ともかくわれわれはこの文明にたいするブラザーズの影響を見始めています。これは緩慢な変化かもしれませんが、人間が生存し続けようとするならばその変化を経なくてはなりません。その主要点は、われわれは正しい道に沿って出発したということにあります。またわれわれがこの行動径路に沿っている限り如何に緩慢に動こうともそれは問題ではありません。多くの場合、最も困難なのは出発という行為にありますが、少なくとも私たちは道を歩んでいますので　それを前進し続けようではありませんか。この道こそだれもが望むより大いなる生活に通じます。それゆえ過去のことは忘れて未来への道を歩くことにしましょう。明日は新しい生活源に満ちた新しい日なのです。

未来はすべての人類に益するよき物事に満ちていますが、古き

ものに執着してそれを新しきものと混ぜている限りそれを達成することはできません。それゆえ、かつて見なかった新しき地平線と生活とを望見しようではありませんか。

地球人は貧困の排除の方向に前進するばかりでなく、機械が人間にかわるというオートメーションの時代にますます突入しつつあります。これはよい傾向です。なぜなら他の惑星では機械やロボットが仕事の九十パーセントを遂行しているからです。これは人間の才能を開発したり自然の法則を探究したりするのに充分な時間を人間に与えることになります。これまでは経済を保つために人間の労力には税がかかりましたが、機械が人間にとってかわるときもはや税金は不要となりますので、課税は他の径路に変えられねばなりません。その径路とは機械文化にほかなりません。そしてそれが現在の安全保障制度に似た方法で操作されるようになるでしょう。しかし機械ではどうしてもやれない仕事があるでしょうが、これは各人の能力に応じて適当に配分されるでしょう。社会保障は働くことに起源を有することはだれも知っていますし、大抵の人はそれを喜んでいます。経済を保つために機械に課税するということになれば、平等な基礎のもとになされるべきです。たとえば米国では自動車、テレビなどを楽しみながら快適な生活を送るには一般人にとって一ヵ月五百ドルを要します。そこで一家族を基礎としてその税は家族各員に平等に課されるべきです。なぜなら万人が等しく購買力を持つようになるからで、人間各人を改良する余裕を与えるようになるからです。

このような制度のもとでは自由企業はなくなるだろうという人があるかもしれませんが、これは当を得ていません。各個人は自由企業の中にあってこそ自己を発達させる余裕を持つようになるからです。これは現在の社会保障制度と異なるものではありません。今機械文明は貧困排除の戦いの様相を呈しています。機械文明がその戦いを遂行しつつあるからです。人間は自己の努力から報酬を得る権利があり、何ら報いなき馬以下であってはなりません。しかし馬のほうが奉仕という分野では人間よりももっと生きる地位を占めています。

ゆえにわれわれは進歩の各段階は人間に課せられた重荷を排除する傾向に進むことがわかるでしょう。だから人間が過去の重荷をこれ以上背負う必要がなくなるとき、全人類にたいしてよりよき奉仕者になるのです。

【デマについて】　さて私が最近心霊団体にたいして講演をしたというので、現在はそうした神秘主義団体を支持しているというデマをケァリフォーニァの或る機関誌が流していますが、これを読んで混乱しないようにして下さい。私は空中に起こる物事について知りたいと願う如何なる団体にたいしても講演をします。信念の如何にかかわらずとにかく真相を知りたいと願う人にたいしてブラザーズの知識は伝えられるべきであって、そうしなければ折角の知識が何にもなりません。万人は知る権利を持っているのです。

金星へ行く

死と空間を超えて

G・アダムスキー

（最初の挨拶数行を省略）

たとえば一個のロケットが宇宙空間の或る一部分を通過する際に、その装置は特殊な情報を地球へ送り返します。ところが、もし翌日にまた同じ部分を通過するとしたら、その装置は全く別な情報を送り返すかもしれません。これは宇宙空間の状況は地球の大気圏内と同じように変化するからです。この事実を理解しないかぎり、このようなロケットからの報告は次々とその内容が矛盾するためにどれが真実なのかわからなくなるでしょう。もちろん現在軌道を廻っている人工衛星群の機械装置もたしかにちょうど同じことをやっています。この理由のために地球の科学者はもっと沢山の人工衛星を送り出すことができれば、気象状況の予報をもっと正確に知ることができるだろうと考えているのです。しかし全宇宙にわたって同じような状況や変化が起こっていることを示すほどに地球から遠方へ飛んで行った衛星はまだありません。もっとも、私の知る限りでは大気圏外には目に見える雲の形成や一惑星の大気圏内で起こるような雷光は存在しませんが——。

ロケットは費用が高くつきます。このために、まださほど多数のロケットは打ち出されていません。人類が宇宙旅行をやっと始めるときにでくわすかもしれない宇宙の状況に関して多量の情報を入手し得るようになるまでには、まだうんと沢山のロケットを打ち出す必要があります。

ソ連は今や金星ロケットを送り出しています。ただしロケットとの連絡は絶えたということですが——。しかしこれは科学的な目的を有するものであり、しかも地球人が必要な知識を入手するための唯一の手段でもありますので、もしこのロケットが正しい方向をとっているならば金星に到着することが許されるはずです。先月すなわち二月（注　一九六一年の二月）の二月二十日、二十一日及び二十二日に私はブラザーズとの会見を許されました。ただし今回は乗船はしませんでした。討議すべきことがあまりに多すぎたため、私はこの金星ロケットの問題をほんの少し持ち出しただけでしたが、ブラザーズの話によりますと、その金星ロケットのあとを巨大な惑星間宇宙船が追跡しているとのことで、しかも妨害はしていないということでした。この金星ロケットからすでに多くの事柄が科学者の手によって判明しています。たとえば、このロケットが金星に着くのは当初五月の終り頃となっていましたが、五月始め頃となり、次に四月中旬に変わりました。こんなふうに予定が次々と変わるのは、ロケットが太陽から出ている何かの未知な力に捕えられ、それが予定された速度よりももっと速くロケットを引っ張っているからです。

以上はブラザーズが確証したことで、安全に宇宙旅行するため

に地球人が大気圏外に関して知らねばならない無数の事実のなかの一つにすぎないとも教えられました。金星の引力をそらせるほどに、ソ連で計算して決定された元のコースからはずれるほどに、太陽の力がロケットを引っ張ったのかどうかについては彼らは何も言いませんでした。論理的にはこれは起こり得ることです。地球人は自分自身の体験及び自分自身の装置によって学ばねばなりませんので、地球人の努力の結果を観察して記録しているプラザーズは妨害もしなければ、彼らの知識をこちらへ与えようともしないのです。だれもが知っていますように、体験から学び取られるレッスンこそは一層よく理解され記憶されるものでありますゆえに、以上のことは至極当然のことです。

もしソ連のロケットが金星の引力圏内に入るほどに彼らの計算が正確ならば、それは金星に到着することが許されるはずです。そのコースが都市または人の住む場所へ直接に落ちるような方向にあるならば、そのロケットは人の住んでいない場所へ落ちるようにコースを少しゆがめられるでしょう。このようにして生命と物資とを保護するのです。私たちが彼らの立場にあればやはりそうするでしょう。そのゆがみはごくわずかなので、そのために地球の基地へ記録を送るのに別段差支えはないはずです。

ところで次のように申しましょう。このロケットは砂漠地帯へ安全に着陸するとします。金星上には地球とよく似た地形があるのです。するとロケットはおそらく「生命は存在しない」という報告を送り返すでしょう。ロケットの内部にどのような装置が仕掛けてあるのか、着陸後にその装置類がどんなふうにして作動し続けるのか、といったことは私たちにはわかりませんが、私としては、この奇妙な物体を調査するために当然現地へ行くと思われる人々を写真に撮り、それを送り返すカメラが内部に仕掛けてあるとは到底考えられません。しかし同じような状態にある何かの物体に地球人が関心を示すのと同じほどの興味をもってそれが調査されることは先ず間違いないでしょう。おそらく調査どころではなくそれ以上のものがあるでしょう。彼らはロケットが打ち込まれる以前からその性質について警戒していたかもしれないからです。

ところで、そのロケットの内部にカメラが装備してあると仮定しましょう。そしてこれが人間、動物、種々の植物の写真を送り返すことができるとします。しかしこのような写真がすぐに世界中に広められることはないでしょう。如何なる国が最初にそれをうまく他の惑星に到着するかは問題ではなく、だれがそれをやろうとも、当分の間噂や反駁が続くでしょう。私ならば次のように言いたいところです。つまり、ロケットの乗員が他の惑星または月に安全に着陸したとして世界向けにラジオ、テレビで放送するとしても、彼らはただ着陸したということしか放送しないでしょう。安全な帰還の途中で別な情報がひそかに政府宛に送られるでしょう。

これは世界に存在する宗教的、政治的な状態と、それに果たして大衆がどれほど信用するかという懸念のためです。地球製の宇宙船で人類が宇宙旅行をするようになるのはさほど遠からぬことであると私は思っていますが、その場合に現地の状況がありのままにすぐ伝えられるかどうかは疑問です。ゆえに、でたらめな報告にまどわされぬようにすることが肝要です。このようなでたら

ぬな報告は今後も次第に増えるでしょう。過去に如何に重要な事件が取り扱われてきて、（注。以下数行は原文の文字不鮮明のため判読困難）

私に与えられて、私がみなさんにお伝えしたこれまでの情報の内容が事実に基づくものであることはいずれわかります。みなさんのあいだに不必要な混乱が起こるのを避けるために、以上の事柄についてみなさんによく注意するようにとブラザーズが私に警告されました。

私はこの書簡を昨年（一九六〇年）にブラザーズと数日間会見して帰ったすぐ後にお送りしたいと思っていましたが、ひどい病気にかかり、一緒にいる助手の女性たちにさえも体験を話すことができなくなりました。今はかなり回復し、人間らしい感覚を取り返し始めていますので、できるだけ情報をお伝えしたいと思います。この情報の性質や　これまで私が与えてきた情報にたいして連絡員中の或る人たちから示された反応などにかんがみて、この書簡をこれまで信頼に答えて下さった連絡員だけにお送りします。この内容を読まれればおわかりになると思いますが、当分の間発表はしないで下さい。（注。ゆえに現在まで発表しなかった）

十二月と二月の両月においてブラザーズと共にすごした期間中の殆どの時間は、世界問題の討議と宇宙で起こっている事柄のもっと明確な概念を私に与えることとで費やされました。この書簡のあとの部分でできるだけ詳細に述べるつもりですが、例外として或る重大な出来事も発生しました。

この世界の状態につきましては、人々のあいだに謙虚さとよき理解とを大きく必要とするように思われます。この基礎の上に立ってのみ、各国政府は各自の問題を調和してやりとげることができるでしょう。米国の新大統領ジョン・F・ケネディーが、米国の青年たちを外国へ派遣してその国の人々と生活を共にしながら無報酬で働かせるという案を立てましたが（注。平和部隊）、これは前記の点について先駆をなすものと言えます。すなわち科学、医学、土地管理、友好精神などを助長するための理解と努力という純粋な動機で派遣するのです。計画にたいする反響を調べるための準備がなされる以前から、これらの任務を引き受けたいという申し込みがワシントンの臨時本部に殺到したといわれています。詳細はまだよくわかりません。任命された人々はこの任務が困難であることは承知しているでしょうが、しかしこのような計画が成功すればそれは体験を通じて得られる理解により大いなる友好化への一手段となるでしょう。そしてたしかにそれは進化を妨げる大きな障害の一つである人間の傲慢さというものを減少させることになるでしょう。

地球の一流の政治家たちが、ブラザーズがやっているのと同じような方法で世界の問題を分析しているのを私はテレビで知って驚いています。この政治家たちは殆ど各国を代表しています。表面的な闘争は避けられるだろうと私たちはみな考えていますし、ブラザーズも干渉はしないでそれとなく影響を及ぼすことによって地球人を助けるために最善を尽くしているのです。当然、私が以前に申しましたように、ブラザーズは各国政府の首脳と共に密接に働いていますが、彼らはひそかに大衆の目を避けています。彼らの名前は決して公にされませんし、彼らの努力が目立つようなこともありません。これらは地球人自身の問題でありますので、

自分たちで一つ一つ解決する必要があります。地球人は感情を支配することなく（注。以下点線の部分は原文の字がかすれて意味不明）・・・・・・・・・次の瞬間に何を期待すべきかを言うことはだれにとっても不可能だと人々は・・・・・・・・・・・ブラザーズはくり返し語りました。だからこそ理解が重要なのであり、また私の著書〝テレパシー〟のなかで述べられている知識とその練習に私たちのだれもが一そうの努力を注がねばならぬことを私が申し上げてきたのです。

発生している自然界の物理的な変化がくり返し討議されました。私たちが学びつつあるように彼らブラザーズもまた学びつつあるのだということを忘れてはなりません。以前にお話をしたと思いますが、変化の過程にあるのはこの惑星ばかりではなく太陽系全体がそうであるのです。しかしこの地球は太陽系全体に発生している他の諸変化と共に周期的な〝地軸傾斜〟を体験しつつあります。このようにして作り出されるもろもろの結果の組み合わせこそ彼らブラザーズが長いあいだ密接にわれわれを観察してきた主な理由となるものです。これらの結果によってブラザーズは全太陽系中に何を期待するべきかを知ることができるのです。この太陽系中の全惑星が異常な気象状況を体験しつつあるのですが、地球だけは〝地軸傾斜周期〟と太陽系の変化との両方から影響を受けています。しかし科学者はこの事実に気付いていません。

この太陽系中に起こると思われる事柄を少しでも理解し得るようになるには、宇宙について明確な概念を持つ必要があります。聖書中の〝天〟という言葉は宇宙空間と太陽系内の空間の両方を意味します。

宇宙空間は始めもなく終りもなく、その中に無数の太陽系があって、各太陽系はそれぞれ惑星群を持っています。〝空飛ぶ円盤同乗記〟の第五章の中に宇宙空間が始めも終りもない海にたとえてあったのを記憶しておられるでしょう。その活動はかなり説明されましたし、太陽系やそれらの形成について少しばかり述べてありました。中央の太陽のまわりを完全なタイミングをもって回転している惑星群を従えた一太陽系は〝一単位〟と述べられました。

そこからこの問題を取り上げて、もう少し深く堀り下げてみますと、一太陽系とは、物体（惑星）にたいする圧力によってその惑星群をそのままの形に保つための原因となる力の組織化された一単位であるといってよいでしょう。と同時にこの力は各惑星にたいしてそれの活動と軌道上の公転を続けるのに必要なエネルギーを供給しています。

かわって太陽系は単位内の惑星群が支持されているのと等しく宇宙空間によって一単位として支持されています。

太陽系や宇宙空間にみなぎるこの力の活動は海洋中の渦巻きにたとえることができます。太陽の引力を太陽系の中心とした渦巻きです。海洋中の渦巻きの中心たる引力が弱ってきて、ついに支配力としての存在を停止するとき、それまで渦の活動の中に集中させられていたアワを含む微少な物質は海洋の総体的な活動の果てしない広がりの中へ解放されます。

太陽系の活動についても同じことがあてはまります。中心の引力が減少して変化し、惑星群のまわりに存在していた圧力がなくなれば、各惑星は崩壊して元のガス状と宇宙ジンとに還ってしま

います。

これは一瞬間に起こるのではありません。私の知る限りでは、その崩壊活動に要する時間は不明です。しかしバランスという宇宙の法則に従って、一太陽系が崩壊の過程に入るにつれて、別な太陽系がかわりに形成されるのです。

ごく最近一科学者が、太陽の磁極が逆転したと声明したことをみなさんはご記憶でしょう。これが地球にどんな影響を及ぼすかについて当時少し議論がありました。非常に申し訳ないことに、私はブラザーズと会ったときにこの問題を持ち出すことを忘れたのです。それで彼らはこのことについては何も言いませんでした。しかし私は自分でこの問題を考えてみますと、この太陽の変化は私たちにもそうであるように彼らにとっても新しい問題であるにちがいないと思われます。彼らは〝傾斜周期〟を体験した惑星群の記録を持っています。ご存知のようにその事に関してはこれまで私と話し合ったことがあるのですから——。しかし現在発生しつつある事は彼らにとっても未知の事柄であり、それで彼らも概してその結果がどんなものになるかを正確には知っていないように思われます。彼らは注意深い観察によって宇宙の一つの型が展開しているのを見ています。この太陽系が崩壊の過程にあることを彼らが発見すれば、そのことを私たちに知らせるでしょう。地球の人工衛星も発生しつつある変化を探知して警告するかもしれません。

近隣の惑星人たちはほど遠からぬ所に新しい太陽系を発見しています。これは人類が住むのに充分に準備がととのっているほどに長く創造の過程を経ています。私たちの太陽系の各惑星が崩壊の過程にあることが彼らの観察によってはっきりすれば、彼らはこの新しく発見された太陽系の各惑星へ移住してしまうでしょう。彼らは、このような必要が起こってくるならば、地球人の宇宙にたいする関心と発達がこの世界の人類にも移住の手段を講じるほどに急速に高まることを望んでいるのです。

もしそうなれば、それはちょっとした聖書の予言の実現となるでしょう。イザヤ書第六十五章十七節「見よ、私は新しい天と地とを創造する。さきの事はおぼえられることなく、心に思い起こすことはない」またマタイ伝第二十四章三十五節にあるイエスの言葉「天地は滅びるだろう。しかし私の言葉は滅びることがない」などがそれです。現象は変化するでしょうが、イエスの語った宇宙の諸法則は不変です。多くの太陽系が生み出され、やがてまた消え去ってゆきますが、無限なる宇宙には始めも終りもなく、永遠にそのままにあるでしょう。

以上の事柄すべては何も知らない人にとってはきわめて怖ろしいことのように聞こえるかもしれませんが、創造の法則が、生まれかわりの法則によって生命の永続性を与えてくれるのです。

十二月の始めにブラザーズと会談したときの二日目に、この〝生まれかわり〟の法則の真実性がはっきりと証明されました。私はいつもそのことを信じていたのですが、自分にとってそれを証明する方法がなかったのです。

私はその日いつものようにブラザーズに会いましたが、今度は直接に宇宙船へ行きました。船内で会った人々のなかに、私が特に心を引かれた、十二才ないし十四才くらいの〝非常に美しい少女〟がいました。彼女はまるで私を知っているかのように私の方

へ歩み寄って来ましたが、これは彼女が前生で私を知っていたからでした。彼女は前生から強い記憶を持ち運んでいて、私との会話で言葉少なに彼女自身が実は一九五四年に他界した私の妻メリーの生まれかわった姿であることを告げたのです！　彼女には英語は困難なようでしたが、すぐれた精神感応力を持っていて、私が彼女の言わんとすることを理解しているかどうかをはっきりと知ることができるようでした。

かなり以前に、彼女が宇宙船で私に会いに連れて来られるかもしれないという約束がブラザーズからなされていたのですが、これはその約束の履行であったわけです。

まだ子供ですが容貌は大部分私の生前の妻に似ています。私の心中にはべつに疑惑の影はありませんでしたが、確信したいと思って、かつて二人で体験した事柄で私の記憶に強く残っている出来事を彼女が記憶しているかどうかと尋ね始めました。

すると彼女は、地球のことや地球上での体験は忘れたいのでそのようなことは質問しないようにと私に頼みました。しかし私はどうしても確信したいと思いましたので、二人が結婚する前に共に楽しみ合った或る出来事について尋ねてみました。すると彼女はそれを覚えていたばかりでなく、それに関連した詳細な事柄を二、三語りました。これは一つの確信になりましたが充分ではありませんでした。なぜなら彼女は私の想念を読み取っていたかもしれないからです。

私は彼女に、なぜ忘れたいのかと質問しました。すると彼女は、私たちの生活を通じて起こった多くの小さな出来事——なかにはあまり楽しくなかった出来事もありますが——のすべてを思い出したいのかと聞き返しました。そして次のように語ったのです。

「人間が大人に成長するとき、本人は自分の生涯を浪費したくはないし、楽しかろうと楽しくなかろうと自分自身の幼年時代に逆戻りしようとはしない。現在というものは生きるため、学ぶため、最大限に楽しむためにこそ今ここにある。それで、別な問題や別なレッスンがやって来るにつれてそれらを解決したり学んだりするための確固たる基礎として留められる宇宙的な性質を帯びたレッスンだけを残して、あとは完全に忘れられねばならない」

それはもっともなことですが、しかし私は或る出来事に関してそれとなく質問を試みました。これは今から約二十年前に発生した出来事で、そのときいくらか不愉快な事もありましたが、とにかく二人で或る程度楽しんだ出来事なのです。彼女は記憶していました。しかもその事について私が忘れていた或る詳細な内容にまで及んで私の記憶を呼び覚ましてくれたのです。すると彼女は話題を転じて、現在彼女が金星で行なっている事について語り始めました。

金星では、幼少の頃は互いに物事の初歩を教え合うのが人々の習慣になっているようです。メリーは私たちが殆ど知っていない宇宙の法則を沢山学んでいるということで、しかもその知識を同じ惑星の年下の子供たちに伝えているということでした。もちろん彼女は現在メリーなどという名前を持ってはいませんが、以上の記憶からして、彼女が私の妻であった当時に彼女を知っていた人々はたしかにメリーだと言っています。彼女が私と一緒にいた頃、宇宙の法則について私たちが議論したり彼女がそれを理解していないと私が思ったことなどをメリーは思い出しながら微笑す

るのでした。たしかに彼女は私が感じるよりももっとはるかに深い理解力を持っていたのです。そして、彼女の現在の生命の進化のための基礎としてその理解力が役立っているのです。また彼女はそれまで私が信じていなかった事などを語ってくれました。そのことは彼女の現在の生活が立証しているのです。しかし、だからといって私を小気味よさそうに見ている様子はありませんでした。むしろ彼女の言葉は簡潔でしかも愛情に満ちていて、それがこんな幼い子供の口から出ることに私は驚きました。

以上の体験はかつてブラザーズが私に語ってくれた話の真実性、すなわち人間が〝死〟と呼ばれる過程を通過する際にそれは全く一軒の家から他の家へ移住するにすぎないという説明を立証しています。環境に取り巻かれたその新しい家は、移住者がかつて前生で生きていた当時に自分で準備した基礎と方法如何にかかっています。私はこのことを長いあいだ信じておりましたが、それを証明してもらう必要がありました。もう少し確信する必要があったのです。ごくかすかな疑惑がわだかまっていました。それで私はメリトに、前生でこちらの山（注。パロマー山）にいた当時に存在した或る状態などについて尋ねてみました。

これも彼女は覚えていましたが、しかし彼女の目付きや、また現在の金星での生活を充分に何の束縛もなしに生きるために過去の生活を忘れさせてくれという彼女の願いなどのため、私はそれ以上その問題を追求はしませんでしたが、ともかく確信しました。

そこで彼女に写真を撮らせてくれと頼みましたら、彼女はこれを拒絶し、写真というものは私の想念を彼女の方へ結び付けるための強力なヒモになるし、また私がその写真をだれかに見せるならばその人の想念をも直接に彼女の方へ向かわせることになるのだと説明しました。

私がこれまで何度も力説しましたように彼女も想念の力を説いていました。また彼女の語るところによりますと、過去を忘れたいという理由は、宇宙の進化において全然価値のない非常に多くの個人的な出来事を過去が保っているからだということでした。これは私たちの生活においてさえも真実であることを私たちは知っています。私たちはすべてみな長いあいだ三百六十五日の毎日を送って生きてきました。毎日は各自の現在の進化の段階にまで引き上げてくれた多くの出来事で満ちています。しかし私たちは過ぎ去った日々の特定な出来事を一つ一つ思い出そうとしているではありませんか。そのどれもがすでに目的を果たしたのです。必要な場合に私たちにとって立派に役立っている多くのレッスンをすでに学んできたのです。しかし私たちはそのレッスンを与えてくれた出来事を明るみに出そうとして過去を詮索しているではありませんか。だからこそ一生涯から他の生涯へ移動することになるのです。

この生まれかわりの問題を語り合っていたあいだに、自殺者、戦死者、事故死した人、殺人による犠牲者などの運命についてメリーに尋ねてみました。

人間はだれもが或るレッスンを学ぶためと奉仕をするために生まれてきたのだと前置きしてから彼女は次のように述べました。

「人間が何かの理由で進歩を中断されたとき、本人は元の目的を完遂するために元の宇宙の教室（注。元の惑星）で生まれねばならない。人間は学ぶ必要のあるレッスンまたはなさねばならな

い奉仕から決して逃げ出すことはできない。

恐怖、憎悪、復讐などの想念を持ち運んでいる多数の戦死者の場合は、各自が元の惑星へ帰る（注。元の惑星で生まれかわる）。すると今度は想念の力のために本人が前生から持ち越した精神的態度と全く同じ状態のまま生まれて来る。大抵の場合このような精神状態を持って生まれ出た理由は本人にも周囲の人々にも理解されない。これは今日世界が直面している無数の青少年犯罪者を生み出す原因となる一大要素になると言える（注。戦後の多くの非行少年は戦死者の生まれかわりの意）。しかしそのレッスンは、その問題を持っている人々と、戦死者に時宜にかなわない死亡を生ぜしめた状態にたいして責任ある、しかも青少年犯罪者と対決しなければならない人々（注。旧軍部及び現代の政治家）との両方によって学ばれねばならない。

自殺者については、これもまた自ら放棄して逃げ出そうとした諸問題を解決するために本人は元の惑星へ帰ってゆく。当然今度は環境は異なるだろう。ときとしてこれは本人のためになることがある。それはちょうど或る教師についていて多くの困難な問題をかかえている子供が別な教師につくことによって自分のレッスンをもっと容易に理解するようになり、自分の諸問題を容易に解決するようになるのと同じである」

しかし言うなれば必ずしもそうであるとは限りません。私（アダムスキー）としましては、それは自分のレッスンを学ぼうとし、問題を克服しようとする個人の真実の欲求と、それともそのレッスンや問題にそむいて再び退化するかどうかにかかっていると思います。

「事故死の場合は、或る死者は自己の天命を全うしたようにも思われ、これは新しい生涯に入ってゆくための始まりのように見える。しかしこの場合もいつもそうだとは限らない。環境の如何にかかわらず法則は働く。もしレッスンが成就されているならばその人はたぶん新しい教室（注。進化した別な惑星）でレッスンを学び続ける。そうでなければ元の教室（注。元の惑星）へ帰るかそれとも同じ程度に発達している別な惑星へ行く」

さて、このコンタクト旅行で数年前私になされていた別な約束が実現しました。私は金星へ案内されてそこへ着陸したのです！この巨大な輸送機はちょうど地球のヘリコプターのようにゆっくりと垂直に下降しました。やがて地面に接近して、それから頂上の平たいビルディングの方へ滑空して行ってその中で停止しました。船体の横腹に戸口が開いて、私たちはビルディングの中へ直接に歩み降りました。ハシゴを伝わって降りるよりもこんなふうにして建物の中へ入るのは、米国東部の或る空港でアメリカン・エアラインズが乗客を降ろしている方法を思い出させました。米国内の他の航空会社はまだこんな設備をしていませんが、乗客が風雨にさらされないようにするために、やはりこんな設備をする計画を立てていることを私は知っています。

金星の空港は着陸する宇宙船のために当然広々とした地域から成り立っています。もっとも地球の空港のような滑走路を必要としませんが——。そのビルディングの平たい頂上は小型機の着陸用に使用されます。私の見るところどうも三階目ぐらいと思われる所へ一同は船から降りて、地球のエスカレーターによく似た装置によって地階に到着しました。しかしビルディングの他の部分

が何かに利用されている様子を見えなくするために、このエスカレーターは壁で囲まれていました。

その日は心地のよい温かい日で、空気は新鮮でかぐわしく澄んでいました。到着の前日に雨が降ったということでした。

メリーと私はかなり小型の公共輸送機に乗り込みました。これは地球のタクシーの役目をするものです。しかし地球の乗物と違ってこれはそのままでどの方向にも動くことができます。機体の中には一人掛けの座席が一列に並んでいます。各座席は台座の上に取り付けてあって、そのためにどの方向にも回転することができ、まっすぐに座ったり、後方へ傾いたり、とにかく最も便利で居心地のよい姿勢に座席を調節することができます。機体全体がガラス状またはプラスティック状のドームで覆われていて、周囲を広く見渡せるようになっていますが、このため乗客は風、ゴミ、その他の天候のわざわいを受けることはありません。地球人もこの種の材料の作り方を知りさえしたら地球の各地でうまく利用できるのにと私は思いました。

この乗物は地上わずか数フィートの空間を滑空するのですが、必要ならば五十フィートまたはそれ以上に上昇するように作られることもあります。

私たちはメリーの家へ直行して、そこで彼女は衣服を着換えたりし、私は彼女の両親に会うことになっていましたので、私たちの乗物は地面に近く滑空していました。私たちは途中で繁華街の端を通りましたが、ここの大通りは広くて所々に造園工事の施された島々が作ってありました。建物はちょうど地球の都市のように大通りの両側に並んでいます。私たちが乗っているのと同じような小型機が道路に沿って動いているのが見られます。人々が広い歩道上を歩いていました。そこで私は思いました。われわれはどこに生まれようとも生活は全く同じようなものだと。しかし私が気付いたのは、金星人は歩きながらもゆったりしていることと、地球上の各都市でこれまで私が見てきた人々の顔よりも彼らの顔にはもっと楽しそうな表情が浮かんでいることなどです。

さてメリーの家に到着すると彼女は運転者に待っていてくれと頼みました。

彼女の家は繁華街からほど遠からぬ所にありましたが、私の感じではその都市の端近くでもあったようです。それは広々とした美しく造園された地域で囲まれた控え目な家でした。その家は地球でいうならば中流程度のものですが、金星にはそんな階級などはありません。だれにも役割があって、それにたいして必要品を分け与えられるだけです。彼らの所有物には美がありますが、地球の少数の人によって楽しまれるような無駄なぜいたくさはありません。

彼女の両親はきわめて快活な若い夫婦でした。メリーはその一人子です。近所の子供たちが戸外で遊んでいて、その家の内外へ走ったりしていましたが、非常によくしつけられているようで、おとなしくて、他人にたいして思いやり深いようでした。以前にも聞かされていましたように、子供たちはその家にいてもまるで自分の両親の家にいるかのように感じているのでした。これは大人のすべてがおよそ子供というものを両親がだれであろうとすべて自分の子供とみなして、そのように扱っているからです。これらの子供たちはメリーの友達なのですが、その多くはメリーより

も年下なのでメリーから教えを受けています。一方、メリーは年上の人から教えられているのです。

私たちは数分間だけここにとどまりましたが、そのあいだメリーは愛らしく簡素な赤と白のプリントのドレスから、全体が純白のドレスに着換えました。両方とも簡単な作りで、ひだ飾りはなく、すらりとしてからだにぴったり合っていました。その家から私とメリーは数棟の大きな科学研究ビルディングの建ち並んでいる構内へ案内されました。ここでもメリーは運転者に待っていてくれと頼みました。

その構内の美しく造園された敷地で他の人々が私たち一行に加わりましたが、これは宇宙船内に一緒にいた人々でした。一行は三つのビルディングを通り抜けましたが、その中で設備について説明がありました。

ここの各教室における指導の殆どは機械によって行なわれます。私はわれわれ自身の脳の働きを理解できないのと同様にこれらの機械の働きも理解できませんでした。そこではコードが差し込まれると解答が出てくるのです。或る教室などは一千人ほどの学生を収容しているということでした。彼らはテレビ型の機械装置で指導を受けています。質問には解答が与えられ、必要ならば詳細な説明も与えられます。これは機械を操作している人によってなされるのか、それとも機械が自動的に解答を与えるのか、私にはわかりません。

或るビルディングの中には太陽系の模型が作られていて、それは成長と最後の崩壊とを示していました。また宇宙内の近隣の太陽系群にたいするわれわれの太陽系の関係とその関係位置が模型で示されていましたが、宇宙の状態にたいする概念のあまりに乏しいために私がそれを言葉で説明するのは到抵不可能です。この地球と太陽系内の他の惑星群との関係にたいする理解でさえもあまりにせますぎるために、私がそこで模型によって表現された光景を見たままに説明することはやはりできません。私たちの前途にはたしかにまだ進まねばならない長い道と多くの学ぶべき事柄が存在しています。

しかし私が知ったことで説明のできる事が一つあります。それは地球人の数え方は逆であるということです。つまり地球は太陽から三番目ということになっていますが、現在の発達状態や知識などからいって実際には最後に位置するのです。なぜならば宇宙的な意味において、一太陽系というものは一番外側の惑星が最低の段階にあり、中心に近い惑星ほど進化の程度が高くなるからです。ゆえに地球は第三番目に位置するにもかかわらず、多くの戦争や個人の自我の発達のために、地球人は自らの発達を低いままにしていたのですが、一方地球を凌駕（りょうが）した惑星群はわれわれが数千年前に達成しているべきはずの業績を打ちたてて、戦争や自我といった制限を克服したのです。地球人はこれまで何度も知識を与えられてきて、それは現在もなお地球に存在しているのですが、もっと実質的な安楽や喜びを得さしめるすぐれた知識を得ることに関心のある人が殆どいないため、地球人は発達するかわりにかろうじて足踏みをしているのです。

別なビルディングの中で私は人体やその他の物の模型を見ました。これは最も興味あるものでした。というのは、細胞と細胞との関係、細胞と細胞から成っている各器官、血液、一単位として

の全身の働き、構造、脳と脳細胞の関係と働き、脳細胞が人体各部に及ぼす影響などをそれが示しているからです。ここでもまた私は、他の面でこれまで考えることができた以上にはっきりと想念の力と想念の働きとを知ることができました。それゆえ、私はテレパシーの発達の必要性を何度も説いてきましたが、ここで再び同じ考えを強調したいと思います。すなわち、人間が自分自身の主人公になることができるのは、理解力の伴った想念の応用とオープン・マインド（寛容の心）の働きにおいてのみ可能であるということです。

金星上での私の滞在は約五時間にすぎませんでしたが、そのあいだできるだけあらゆる物を見ることに努め、目撃した物すべてを記憶にとどめようと努力しました。その科学研究ビルディングの見学はあまりに早く終わってしまいました。一緒に船まで帰ることになっていた他の人々に付き添われて、私とメリーは待っていた乗物に入り、まもなく再び空港へ帰りました。

ここで少し興味ある事柄を記しましょう。ビルのあいだでなく別な所を歩いていたとき私は疲労を感じました。このことを考えていましたら、これは私がメキシコ市へ行ったときに感じるのと同じ状態であることに気付きました。それで私がいたあたりの金星の大気の圧力は、メキシコ市程度の海抜に見られる気圧にたとえてよいでしょう。場所によって呼吸の困難さが変わるということはありませんでした。

メリーの地球上の両親と彼女が特に好きであった或る姉は、メリーが他界するよりもずっと以前に地球上の生命を終えていました。前生でメリーは、この人々は金星で生きているのだとよくロぐせのように言っていましたので、自然、私はメリーと語っているあいだもこの問題に心が傾いていましたが、べつに尋ねはしませんでした。すると宇宙船の中でメリーはその問題を持ち出して次のように語りました。

彼女の現在の金星上の両親は前生の両親ではなく、地球の両親は死後金星で生まれかわって現在住んでおり、彼女の家族の友達であるというのです。しかしさほど深いつながりはないということでした。そこでメリーが充分に気付いているのは、両親というものは、一人間が新しい肉体をもって生まれるための入口として役立つにすぎないということです。この考えは彼女が地球にいた当時彼女にとっては全く承服しがたいものでした。なぜなら両親と子供とのきずなを彼女はきわめて深く感じていたからです。また、彼女の姉も金星に住んでいて、地球の両親よりももっと現在は親しくしているということです。両親はさほどではありません。どうも兄弟、姉妹、兄妹のきずなが他の親族関係よりももっと親密に続くように思われます。もっとも二人の人間が右の関係のどれかにあるからといって必ずしも次の生涯で同じ惑星に生まれかわるというわけではありません。地球上のメリーの家族は大家族だったのですが、兄弟姉妹のなかで右の姉だけが現在金星に住んでいる唯一の人であるということです。二人の妹は今もなお地球で生きています。

私たちの宇宙船が地球へ帰るとき、船体の窓から外部を見るようにとすすめられました。宇宙船は電離層の外にあって、空間を動いているさまざまの大きさの破片が見えました。かなり大きいのもあります。これらは地球から打ち出されて見失われた人工衛

星の残骸だということでした。それらは一般に想像されているように軌道上を飛んでいるのではなく、まるで部屋の中で日光を受けて動きまわるホコリのようにさまよい動いているようでした。こんな物もみないずれは自然のガス状や極微の粒子に還元して、宇宙の法則に従って再生するのでしょう。

私やあなた方にはまだ多くの疑問が未解決のまま残っています。私は金星旅行を体験して多くのレッスンを学んだことを感謝しています。これから先の宇宙旅行はまだ約束されていません。

しかし人間が持つことのできる最大の確信が私に与えられました。すなわち、人間が地上の生命を終えて他界するとき、神秘的ないわゆる〝霊界〟というものには出くわさないということです（注。霊界は存在しないの意）。

生長と進歩の時間の長さは惑星や個人によって相違します。人間が持ち運ぶことのできるすべては、本人が学び取って応用した宇宙の法則の記憶だけです。心の上で知っただけでは充分ではありません。個人の記憶は必要ならば思い出すことができます。しかし応用されない記憶は急速に背後へ消え去ってしまい、現在の生活の新しい日々の要求や関心などで置き換えられるのです。

以上の知識をあなた方にお伝えできることをうれしく思いますとともに、それが〝無限の生命〟の道を歩んで生長し進化されるあなた方に役立つことを望みます。私たち各人の行く手に何が横たわっているかを今語るのは困難ですが、〝無限〟という道で私たちの行く手にあるものは、ごく最近私たちに与えられてきた知識と証拠でもって見つめれば、それは美しい存在です。しかし私たちは、その知識が今ここに自ら現われる瞬間ごとに、喜んでそれを応用することを学ばねばなりません。いろいろな問題が解決を求めて絶えずこちらへやって来ます。これは私たちが如何なる惑星へ行こうとも如何なる生涯をすごそうとも起こる事実です。しかし私たちがいつも持ち続けるすべては永遠の〝今〟です。その〝今〟こそ私たちの応用すべきものであって、私たちの知識と理解力の貯えがいつまでも増大するであろうことを〝今〟から学び取らねばなりません。

（19ページより）何かの映像を描きます。そしてそれが印画紙に焼き付けられるようにと念じて、その思念力が強ければ、あとで印画紙を現像すると心中で描いた映像が現われます。この場合頭部と掌との距離はせいぜい十二インチ位のものでしょうが、これと同じ想念伝達が町から町へ、更に宇宙空間を越えてやれるのです。大切なのは「必ずできる！」という自信を持つことです。印画紙による実験の場合、当初は何度やってもうまくゆきませんが、そのうち突然成功することがあります。最初写るのは単に光線が交錯した状態のものであるかもしれませんが、これも想念が感光したのです。思念が確固たるものとなれば映像の輪郭もはっきりとしてきます。だれもいない道路を歩いていて、突然「だれかが近づいて来るな」と感じたりするようになれば、これがテレパシーです。

質疑応答

一九六三年五月
デンマークにおける講演会より

G・アダムスキー

問　テレパシーについて説明して下さい。

答　テレパシーというのは科学的な目的をもって用いられてきた言葉です。科学界や米政府などもその言葉を使用しています。またデューク大学その他多くの大学でもテレパシーを研究していますが、彼らは第六感だと称しています。とにかくテレパシーは新しいことではありません。人間は本来テレパシーの能力を持って生まれています。あらゆる動物も植物もその能力を持っています。それは万物の生命そのものです。生命は感覚器官に全然依存していません。人々のなかには予感、透視などの力を持つ人がいますが、実際にはこれらは一つのフィーリング（感覚）がそのように呼ばれるだけであって、あなたもそのフィーリングを持っているのです。それは警戒の状態であって、その状態が〝意識的意識（注。宇宙の意識を意識すること）〟であり、それによって周囲の事物を意識できるのです。あなたもテレパシーによる意志伝達ができるのであって、動物も植物もあらゆる物がその能力を有しています。〝意識〟とは各種の形態を表現する生命です。たとえばあなたは善良な心（センスマインド）を持っているかもしれません。しかし意識を失えばあなたの心はもう善良ではありません。それは死んでしまいます。一方、心を解放して意識的になりますと、きわめて生き生きとしてきます。心よりもフィーリングの意識的な状態を保つことが重要です。意識は心とは別個に働いて生きていますが、心は意識を離れて生きることはできません。これがテレパシーの本質です。しかるに人間は意識的意識を高めようとはしないで常に音声に頼っています。あなたが私に発する質問でさえもそれは先ず無言のままにあなたの内部でわき起こります。するとあなたはそれに言葉を与えます。そこで私はあなたの考えや印象が何であるかを理解します。つまりあなたは印象に音声を与え、私は音声で答えるわけです。そんな場合、印象を完全に表現するのに適切な言葉が見当らないことがあります。これはヴァイオリンを手に取って美しいメロディーを奏でても、そのメロディーを言葉で表現できないのと同様です。

ネズミに関して聞いたことがあるでしょう。船が沈没する前には船中にいるネズミがまっ先に逃げ出します。これは「この船は沈むことになっているから早く逃げるほうがよい」という印象または衝動を事前にネズミが感じるからです。しかるに人間はこんな場合そうした予感力を持たないため、いざとなって周章狼狽します。また、あなたが見知らぬ犬の方へ近づくとします。そのとき犬はすでにあなたの心中を察していて、犬を傷つけるつもりならばただちに身構えますし、可愛がるつもりならば尻尾を振って近寄って来ます。ここには音声というものはなく、すべて印象の交流があるのです。

他のあらゆる場合にこれがあてはまります。ゆえに印象の感受力を増大させることが重要です。この練習法としては、一枚の写真用印画紙を両手の掌の間にはさんで心中に（前ページへ続く）

生命の科学

完

G・アダムスキー

第十一課　宇宙空間の探険

前課では宇宙空間の探険法を述べようと約束しました。そこでひとつ次のような解説を提供して、あなたがこの論理的な手順を如何にうまく感知するかを調べてみることにしましょう。

昔の人は宇宙空間は何もないカラッポな状態だと思っていましたが、これは肉眼で何も見ることができなかったからです。しかし種々の観測装置の発達した近年は、宇宙空間は活動的であって、物体を生み出す不可視の元素類に満ちていることをわれわれは知っています。意識はこのことを絶えずセンスマインドに伝えようとしているのですが、肉眼が不可視な現象を見ることができなかったために、センスマインドはそれを認めようとはしませんでした。それで種々の装置によってのみ意識が正しかったことが証明されました。

あらゆる惑星や天体は肉眼には見えないけれども意識には見える宇宙空間の諸元素から生まれます。

前にも述べましたように、肉眼はそれを通して意識が外部をのぞき見る窓ガラスのようなものです。それで〝意識によって見る〟方法を続けることにしましょう。

元素にはさまざまあって、大嵐のようにすさまじいスピードで空間を動いています。ときどき微小物が結合して、電磁気的な吸引力によって他の物質を引き寄せます。

惑星の形成においてはこの吸引が続いて、次第にふくれあがる塊が中心の方へより大きな圧力を求めます。するとついにその球体内部の燃焼によってそれ自体の熱が生じます。今度はこの熱は諸元素を凝固させ、それがまた惑星を形成する諸物質中に眠っていた植物の種子を生み出します。この結果、コン虫やその他の生命体が惑星から生まれ出ます。われわれの惑星である地球は宇宙空間から生まれ、時速一、一〇〇マイルの割合で空間を進行しています。ですから他のすべての惑星も地球と全く同じことをやっていると考えるのは筋が通っています。もちろん各惑星は大きさが異なりますし、なかには他の惑星よりも同種の鉱物を多く持つものがあるのは、地球の各地によってそれが異なるのと同じです。しかしすべての惑星は宇宙空間に見い出される共通の物質から成り立っています。

こうした現象が発生していることや、惑星がどのようにして創造されたかをあなたは今感知することができますか？　また宇宙空間の諸元素が樹木の如き惑星上に見られる万物を作り出す潜在能力を有していることがわかりますか？　もしあなたのセンスマインドが、意識が現在洩らしつつある物事を感知することができ

るならば、あなたは進歩していることになります。

以前にも述べましたように、宇宙空間すなわち意識は始めも終りも知りませんので、宇宙空間には惑星その他の天体が無数にあるのです。他の天体というのは恒星、スイ星その他地球と同様の固体を意味します。さて地球がそれ自体から地上の万物を生み出したとするならば、他のあらゆる惑星も同様であるのは当然です。そして意識がこのことを人間に伝えるのです。各惑星は年令が相違するかもしれません。それゆえ人間のセンスマインドの程度も惑星によって異なるかもしれませんが、これは地球上の各地で人々の程度が異なるのと同様です。しかし地理的な型は地球も他の惑星も大差はありません。

他の惑星へ旅する前に、ここでひとつ遠隔透視といわれる状態を取り上げてみましょう。この現象が起こる場合、センスマインドは周囲に関心を持たなくなり、映像にとらわれてしまいます。更に意識はそれ自体にマインドの注意を引き寄せますので、映像を見ている本人の前を他人が通ってもそれが感じられません。換言すれば、意識とマインドのあいだに一種のテレビ放送の関係ができて、時間と距離は意味をなさなくなるのですが、これは意識がもたらす或る光景にマインドが関心を持つためです。多くの人は〝空飛ぶ円盤同乗記〟を読んでいるあいだに私と一緒に私の体験を味わい、私が目撃した光景や与えられた知恵の言葉を述べる際に私が起こしたのと同じ高揚的な気分を起こします。これこそあなたが自分をその中に置かねばならない状態、すなわちセンスマインドと意識の結合状態なのです。両方とも等しく真実であるからです。

一例として土星へ行くことにしましょう。われわれは今地球と殆ど大差のない一惑星にいるとします。ただし地球の七倍もあるために大きさは異なります。先ず最初に気付くのは空が地球の空とはわずかに違うということです。それは空中に反射する例の〝環〟のために青色が少し乳白色を帯びています。それはまるで息がつまるような美しさで、神の面前にいるのではないかと思われるほどです。建物の多くは白色ですから空の青味がかった乳白色を反射し、山々にある雪も同様に輝いています。また各地には大きな氷河もあって、これも鏡のようにその色を反射しています。こうした色光がわれわれの身体を貫くように思われますので、自分が別人になったような気がします。あなたは見る物すべてを意識で知覚するようになり、創造主の家すなわちこれまであなたが求めてきた天国にいるのではないかという感じがします。

こうした感じが、意識がセンスマインドに伝える最初の印象です。何もかもが美しいので、センスマインドは「一体現実の光景だろうか？」と疑問を起こしがちですが、一方では自分が固い地面の上を歩いていることを知っています。

さて、その惑星の人々と交わると奇妙な事が起こります。あらゆる人がこちらを見透すようで、しかもこちらが心中で考えている事柄を知っているように思われるため、だれもが自分の一部であるような気がします。しかしこれは習慣的なセンスマインドの反応によって起こる感じなのであって、まもなく気楽な気持になりますが、それはその惑星の人々がこちらを兄弟とみて理解していることがわかってくるからです。あなたは土星人のあいだに嫉妬、非難などのかけらもないことがわかるでしょう。彼らの家へ

招待されると、彼らがあらゆる物を等しくわかち合っていることに気付きます。このことは特に女性間で著しいのですが、それは土星の婦人が、母親が子供にたいして持っているのと同じ感情を持って互いに尊敬し合っているからです。これは姉妹同志の持つ尊重感よりももっと高度な尊重感なのであって、彼らの万人にたいする関係は〝他人は必要なのである〟という見地に基づいています。一方、男は地球人が聖母（マドンナ）にたいしていだいているのと同じ感情で女性を尊敬しています。婦人は人間を生み出す母体であるからです。また婦人は男を等しく高く尊敬し、宇宙の原理の現われ、すなわち意識の男性的部分として男に名誉を与えています。

彼らの面前にいますと、われわれは新しく生まれかわったように感じます。彼らの家屋や環境は美しいこと限りなく、彼らの意識を反映しています。土星はこの太陽系内で一種の〝ハカリ〟すなわち法廷としての惑星です。

以上、私は土星の状態を簡単に述べましたが、あなたが意識によってそこへ行くことに成功するならば、もっと詳細を知ることができます。私は宇宙船によって肉体とともにそこへ運ばれましたので、あなたの印象が正しいかどうかはわかります。それによってあなたがどんなにうまく〝意識の旅行〟ができるかが示されることでしょう。

人間の心が存在する所には本人もいるのだとイエスは言いましたが、これは「人間の意識が存在する所には本人もいるのだ」と言い換えてよいでしょう。

さて今度は金星を観察することにしましょう。これは土星よりも小さな惑星です。ほとんど常に雲で覆われていますが、ときたま雲が切れて日光が差し込むこともあります。空気は湿潤ですが、蒸し暑くはありません。あちこちに氷や雪があったりして気候の変化がありますので、他の惑星と殆ど同様です。

地理学的にいって金星人は地球人によく似ていますが、彼らは物事にたいする見識が広く、土星と殆ど同じタイプの環境を持っています。

人間の諸問題に留意する多数の協力者から成る政府（といえばそんなもの）が一つあり、土星人と全く同様に万人は互いに尊敬し合っています。

各惑星がヒューマニティーの或る面を表わしているのと同様に、金星も万物を一体に結束する〝宇宙的な愛〟を表わしています。そして各人すべての才能は発達する好機を与えられています。あらゆる表現はきわめて芸術的で、行なわれているすべての物事に愛を表わしますので、それらをながめれば心は高潔になります。

次に火星へ行ってみることにしましょう。ただし私はまだ肉体的に行ったことはありませんが、意識によってそこの状態を或る程度知っています。この惑星は一体に雑然としていて、産業が盛んで地球によく似ています。居住地域には水が少ないために農業は二次的なものとなり、しかも殆どドライ・ファーミングです。使用する水は極冠や氷結地帯から水路で引かれています。塩水が豊富にあって近年はそれを真水に変えています。塩水の水路があって、それが船を奥地の都市へ運び、そこで真水に変えられます。昔は塩水と真水とを一対二の割で混ぜることを試みたのですが、真水の量が充分でなかったために農業には不向きでした。

火星も人口は密です。昨年私は火星への旅行を約束されました

ので、行った際には、私が意識からセンスマインドにどれだけ正確な知識を与えられたかを証することができるでしょう。

これまでに述べましたように、意識が洩らしてくれる物事をセンスマインドが信頼するならば、人間は意識によって空間を旅行することができます。地球人のなかにはこのことを知らないで宇宙空間を旅している人があります。或る場合には睡眠中に起こることがありますが、その場合は目覚めたときに強い印象となって残る夢として現われます。特に奇妙な場所を見た場合は、その夢を思い出すことはセンスマインドにとって不可能となりがちです。

われわれは、意識とはその中に万物が生きている生命の大海であるということを忘れてはなりません。その大海の外には生命はありません。それゆえセンスマインドが「自分はその海の中に生きていて、意識に頼らねばならないのである」ということに気付くようになるとき、この自覚がさまざまの新しい知識をマインドに印象付け始めることになります。ちょうど大海中の魚が水中を伝わって来る大嵐に感付くほどに警戒的になるのと同じです。

人間のセンスマインドも宇宙のどこからかやって来る印象を感受する能力を持っているのだということに気付くならば、意識という生命の海の中でこれと同じ探知力を持つことができるのです。このことが理解され応用されるとき、人間は遠近にかかわらず思いの場所へ行くことができます。〝真のあなた〟は意識であり、センスマインドと肉体はあなたが用いる道具にすぎないからです（注。以上は遠隔透視を意味する）。

私が一九五〇年代の始め頃に教えておりました当時、一人の研究者があいにく病気になり、会合に出席できないことがありました。ところが次の週に一同が帰って行ってから、その人は「出席できなかったけれどもあなたの指導を受けた」と報告してきました。私は会合を指導しながら、しかも一方では本人の病床で指導していたことが後に判明したのです。つまり私はセンスマインドと肉体を通じて多数の出席者を指導しながらも、同時に私の意識は病人の所に行っていたわけです。これは一個のマイクロフォンを使用して二個のスピーカーから放送するのと同じです。私が出席者に伝えていた事柄を意識によって肉体中のセンスマインドにも伝えていたわけで、一個所では私は肉体という形をなし、他の場所では想念体であったのです。

ここで想念体というものについて説明しましょう。人間は影が肉体の表われであるように、意識の想念的な現われであるとも言えます。それで右の会合の場所では私は固形物（肉体）として現われていて、離れた病床ではその固形物の影として現われていました。肉体は或る場所にいながらも想念体は如何なる遠隔地へも送られて他人によって感受されます。私がパサデナで講演をしていたとき、或る人が「病気の友人を救ってやってくれ」と依頼してきたことがありました。そこで私は予定通りに講演を続けて、しかも同時に病人のマクラ元へ行ったのです。私は意識的に同時に二個所にいるのですから。病人の氏名も住所も知る必要はありません。その後、私の援助を依頼した人に会ったらその人は喜んでいました。病気の友人はただちに快方に向かい、まもなくベッドを離れて外出できるようになったというのです。こんな体験は病人に限ったことはなく、その他多くの種類のトラブルを除いた経験を私は持っています。これらは私の睡眠中には起こらず、何

かの仕事を行なっているときに発生します。ゆえにこうした体験は意識による旅行であったと言えるわけです。

しかしその後円盤問題に興味をうばわれてしまってから、そのような体験は起こらなくなってしまいました。これはイエスが言っていますように、人間は二人の主人に同時に仕えることができないからです。だが現在は元の教えの分野にもどりましたので、これからはまたそうした奉仕を続けるつもりです。

私が右のような体験を述べますのは、ただ人間の内奥の能力は本人の意識の作用にかかっているだけで、心霊主義とは何の関係もないということを明らかにしたいからです。それは人間の半身すなわち意識という部分を理解することにあります。人類の九十九パーセントは自己の意識の能力に気付かないでセンスマインドに振り廻されて生きています。意識によればあなたは宇宙のどこへ行くのも自由ですが、センスマインドに頼っていたのでは一個所につなぎとめられているだけです。私は講演を行なうとき一個所につながれていますが、意識によって私が求められた場所へ行きました。意識は安定した面にありますが、センスマインドは変化した面にあります。センスマインドは新たに学ぼうとするために常に変化していますが、意識はすべての知識です。

恍惚状態（トランス）（注。霊媒などがおちいる状態）とは一体何でしょう？　このいわゆる通念は前にも述べましたように指導霊が自分を指導しているのだと考えるために起こる〝真実〟の歪曲です。あなたがテレパシーの開発中にこうした印象が来たとしても（注。指導霊がかかってきたという印象）驚いてはいけません。

あなたのセンスマインドは急速に全包容的な意識を吸収することはできないということを忘れてはなりません。したがってセンスマインドが意識とつながって確固たる発達をとげるまでは、意識はとぎれとぎれにやって来ます。たとえば、内径一インチのホースは径一インチの棒状の水流を通しますが、水がノズルからほとばしり出るとそれはさまざまの大きさの無数の水滴となって分離します。そこでわれわれは各水滴を「大きさが異なる」と言います。しかし植物に落ちる各水滴はそれに水分と生命を与えます。したがって各水滴のエセンスは総体的には結合するのであって、ホース中を流れているときと変わりません。〝宇宙の意識の流れ〟もホース中の水と同様です。現象界においてはより良き奉仕をするために意識は一応自らを個々に分けているのです。

言い換えれば、〝宇宙の父〟と〝宇宙の母〟はその創造物を決して見捨ててはいないのです。しかるにセンスマインドはこのことを理解しないので、その場合マインドはもろもろの不可思議な現象を神秘家が行なうものと考えがちになります。それについて例をあげましょう。そこで山上におけるイエスの〝変容〟について説明します。

そのときイエスのセンスマインドは意識によって恍惚となっていました。彼は自身のマインドの意志を意識の意志にゆずり渡していて、自身は聴き手になっていました。そうなったとき彼の顔は変化し、彼のマインドと意識がかつて表現したことのある多くの個々の容貌を現わしました。そのとき自分では何が起こっているかに充分気付いていました。これを見ていた弟子たちはイエスの容貌がいろいろ変わるのを見てモーセその他の人間たちが現われたとイエスに語りました。するとイエスは「私の生命は多数の

人の生命である」と答えました。言い換えれば彼はそうしたさまざまの人々の生涯を経てきたのであって、意識がそのことを彼のマインドのスクリーン上に再演し、かくて彼のマインドの生命を現世の段階にもたらしたわけです。

これは、もしあなたが、自分の誕生日にまでさかのぼろうとする場合、あなたのセンスマインドを現在までの生長に関心を持たせて恍惚とさせるのと異なりません。あなたの意識が自分がこれまでに経てきたさまざまの発達段階や体験類をマインドに伝えるのです。そのために容貌の変化が現われるわけです。イエスにもこれと同じことが起こったのであって、彼は弟子たちが見ているあいだにそれを実現させたのです。

これが唯一の真の恍惚状態（トランス）であって、そこにはセンスマインドと意識が一体となって働くという宇宙の原理があります。世間の霊媒などのいわゆる恍惚状態（トランス）は、単なる幻影、希望的観測、自己催眠などであり、センスマインドが指導霊の指導を受けていると思い込んでいるときは特にそうです。そんなものよりもあなたの半身である意識こそ頼りになる唯一のものです。

だからこそ聖書では「自分の前に偽りの神を持つな」と言っているのです。人間だろうが他の何であろうが、万物は多くの体験と変化を経てきているからです。われわれが永遠の生命を受け入れるならば、永遠の未来と同様に永遠の過去も存在するのです。イエスは言っています。「私がこの世の人間ならばそれと戦うけれども、私はこの世の者ではない」彼は〝父の家〟には多くの住まいがあることを明言しています。しかし現象としての人間のセンスマインドが記録の保持者である意識に従属しない限り、このことを知ることはできません。それが達成できると〝啓示〟がやって来るのです。

以上は映像ばかりでなくいわゆるテレパシーをも含んでいます。したがってあなたは映像のかたちで啓示を得るのみならず、想念の印象をも感受します。忘れてならないのは、われわれは必ずしもこれまで高貴な魂の持主ではありませんでしたので、何かの映像や印象（注。過去の生涯における自己の姿など）を感受してもそれは自己の現段階の理解力にとって心地よいものではないかもしれませんが、それはやはりわれわれの発達の一部分であったということです。われわれは過去の行為を是正することによって高貴なる方向に生長するのです。

第十二課　絶え間なき進歩の報い

第十一課では、あなたへやって来るもろもろの啓示は過去のあなたの一部であるかもしれないのでそれを無視しないようにと警告しました。この理由はきわめて重要です。というのは人生は〝はめ絵〟パズルのようなもので、あなたが完全な絵を望むならどの部分も無視できないからです。あなたが好まない部分を何か他の物で代用するならば絵は完成しないでしょう。しかるに人間は好き嫌いの生活をすごしてきましたので、この傾向があるのですが、人間は人生の完全な絵を持つためにはこれに打ち勝たねばなりません。自分の好まない物事を他の物事と取り替えるならばあなたは神秘を生み出すだけでしょう。

われわれが善とか悪とか「関心が持てない」とか言っている物

事は理解力の欠乏による法則の誤用にすぎないことを常に記憶すべきです。またこうした誤用のすべては宇宙という神の国の中で起こっているのであって、その外側ではありません。あなたを家の中で過失をおかす子供にたとえてごらんなさい。その過失によって物事の正しいやり方を学ぶのです。生命というものを理解しようと思えば、そのあらゆる面を直視しなければなりません。

前にも述べましたように、あなたは理解のために物事を分析する権利を持っていますが、ただし非難したりけなしたりしてはいけません。分析は如何にも非難の線に近いため、ときとしてわれわれの言うことは非難と間違えられます。しかしあなたの持つ動機はこの過失をおかすことにたいする衛兵です。あなたの動機が理解の目的を有する高貴なものであるならば、他人の言うことを心配する必要はありません。分析に際して過失をおかした場合は素直にそれを認めるべきです。そうすればあなたの目的が高貴であったことを立証できるでしょう。

長い時代を通じて多くの習慣が人間のセンスマインドの主人公になってしまいました。これは世代ごとに強化されています。ゆえに習慣を除くのは容易ではありません。しかしわれわれはそれを根気よく続けて、古い習慣を新しい知識と取り替えねばなりません。これが自分の半身（意識）を知る一つの方法です。

第一課では生命の分析と物事の因果関係に気付くことの重大さについて述べました。したがってセンスマインドを観察するか、または意識による印象の感受によるかしてあなたの感知力を増すように努力し続けなさい。

第二課ではセンスマインドとその構成部分について説明しました。ゆえにあなたのセンスマインドが外界の諸現象に惑わされないように注意しなさい。またあなたのセンスマインドが肉体の構成とその目的を知ることに等しい関心を持つようにしなさい。肉体や他の万物の働きの驚異を感知しなさい。

第三課は宇宙の法則の応用法です。その法則があなたの生活の主人公になるまで日常生活で応用しなさい。その法則が万物の中で働いていることを見るようにしなさい。

第四課では人間の知覚し得る最小の物から最大の物に至るまで万物の相互関連関係が説明されました。万物が互いに頼り合っていて、分裂がない状態を観察しなさい。

第五課では、英知と生命力は意識から来ることを説明しました。または如何にして創造主があらゆる生命体を通じて自己を表現しているかについて話しました。

第六課は〝清新さ〟に関する章でした。肉体を若返らせるには先ずセンスマインドを若返らせねばなりません。これはセンスマインドが、発達しているあらゆる新しい物に関心を持つときに達成されます。

第七課は、過去の体験から益を得るための〝宇宙の記憶〟と記憶の重要性に関するものでした。センスマインドが記憶を永遠に保つ意識と融合しない限り、センスマインドは記憶のよき保持者とはなりません。

第八課では、宇宙の一体性と、人間が他のものからの分離感を起こすのは知識の欠乏からである旨を述べました。イエスは「あなたが他人を傷つけるならば、それは私を傷つけることになる」と言っています。〝全体〟の中には分裂や分離はありません。わ

れわれは万物の創造主である意識をセンスマインドの支配者たらしめるならば、淋しさや分離感は消えるでしょう。こうした孤独感は創造主の親密さで置き代えられます。

第九課は、コズミック細胞と物欲細胞の活動に関する記事でした。これは、人間の利用に適する物を作るために自然界の物質を用いて組み立てる物に似ています。センスマインドの習慣を通じてわれわれは物欲細胞を作り出しています。〝息子〟としてのセンスマインドは〝父〟の能力を有しているからです。センスマインドが〝父〟を信用しなければ、それは自ら指導権を横取りします。これは創造主とセンスマインドとの分離を引き起こします。だから父と息子は一体となって働かねばならないのです。「私と父とは一体である」とイエスは言いましたが、これは私であるセンスマインドと意識とは一体であるの意味です。すなわちセンスマインドとしての私は意識の行なう物事以外の何もしないということです。意識の伴わないセンスマインドは死物であるからです。

第十課は意識による旅行でした。イエスは、人間の心が存在する所には本人もいるのだと言っています。これは、人間が意識的に存在を知覚する場所には本人もそこにいるという意味です。

宇宙空間の探険に関する第十一課は、意識としての空間を説明しています。ゆえにセンスマインドがそれと混和するならば、それは空間の如何なる場所をも探険できるのです。その解説に返りますと、人間の心が存在する場所には本人もいるということになるのですが、この意味を分析してみましょう。たとえば、建物の中に歩いて入って行く人は、内部の何か一つの物に心を引きつけられて、同時に多くの物は目に映りません。これは〝警戒性探知力〟の説明のために引用したのです。二人の男がビールを飲みに酒場へ入ります。一人は観察力が鋭くて、大きな美しい絵がかかっているとか、魅力的な女性がただ一人で奥に座っているとか、その他多くの物が心に焼き付きます。飲み終ると二人は席を出て行きます。そこで観察力の鋭い男は絵や女性について話し始めますが、飲むことにしか関心のなかった他の一人はそんなものを見ていませんので、相手の話を聞いて関心を起こし、もう一度店へ引き返してそれらを見ようと言います。これと同様に、二人の人間は意識的に旅行することができるのですが、探知力のある人は他の人よりももっと多くの物を見る場合があるというわけです。

第十二課は第十一課までの要約であって、読者が生命を理解しようというまじめな努力によってこの講座を自分の一部にされることを期待しています。これはまだほんの序の口にすぎません。与えられた要点を復習するたびごとに、あなたは〝宇宙的自我〟の発達を拡大することになるからです。あなたは〝自分自身〟以外に他の何物も必要はありません。永続的な発達に必要な道具類のすべてをあなたはすでに持っているからです。

地球上のあらゆる物は発達し続けていますので、時折新しい知識が他の惑星の兄弟からもたらされているということが考えられます。ゆえにあなたが知らせてもらいたいと思うならば、当方へご連絡下さい。名簿中にあなたの名を加えておきます。またあなたがこの講座を如何にうまくマスターしたか、どのような疑問を持っているかを知らせて下さい。個人的にいちいち回答を差し上げるのは不可能ですが、時機が来たら質疑応答のパンフレットを作るつもりです。

ブラザーズ（他の惑星の兄弟）は読者の多くがこの講座を通じて充分に発達し、研究グループを組織することを望んでいます。そうすればあなたは〝自我〟を理解するのに自分ばかりでなく他人をも援助することになるでしょう。そうすることによってわれわれは更に良き社会を持つことになるのです。

あなたが研究してきたこの講座はブラザーズから祝福されています。ゆえにこれは永遠への大通りの完備した個人宛の贈り物として栄光ある講座です。センスマインドは与えられた教えのすべてを記憶することはできませんので、発達を続けるためには何度も読み返さねばなりません。

一日に一課の少なくとも一ページを読み直して、その中に述べてある事柄を思い浮かべながらその日をすごすのは賢明です。そうすればいつの間にか多くを身につけている自分に驚くでしょう。

この講座は現在でもそうですが、二十年後に読んだとしてもやはり変わらぬ価値があるでしょう。価値に変化はないからです。これはあなたの人生の道標となるでしょう。読者の殆どが生活の充実を望んでいることを私は知っています。また、この講座中に盛られた知識を応用することによってそれを達成できることも私は知っています。しかし緩慢な進歩に失望してはいけません。緩慢な進歩は堅実な成長です。多くの古い習慣を除くのは最初は容易ではありませんが、あらゆる物と同様に金鉱は表面に現われてはいませんので、われわれは困難な仕事であってもそれを堀り出さねばなりません。

あなたの〝真実在〟という金鉱を得るためには堀り続ける必要があります。これには勇気と決心を要しますが、忍耐によって達成する人にはこれは永遠の至福という報いをもたらすでしょう。私は自分の意識からあなたを除外するようなことはしません。ブラザーズもそうでしょう。私は進歩の路上であなたを援助しましょう。

願わくば創造主の意識があなたの意識の中に現われんことを！願わくばあなたが宇宙の英知と共に歩み、語らんことを！　耳で聞いたり目に見えたりしなくても信ずることのできる人は幸いです。肉眼で見えないものこそ力であり英知なのであって、それによってわれわれは見たり聞いたりできるからです。

あなたのセンスマインドの中にひそむ意識を信じなさい。そうすればあなたはこれまで別れていた〝宇宙的自我〟と共に歩むことになるでしょう。生命の真のエセンスを盛った杯は今あなたの前にあります。それを毎日飲みなさい。そうすればあなたは決して渇くことはないでしょう。

宇宙の意識とは、水流を上方に噴き出して次にそれを無数の小さな水滴にしてあらゆる方向に落とし、再びプールの中の水と一体化せしめる噴水のようなものです。こうして人間がひとたび自己の真実在と一体化するとき、その真実在の意識の中に含まれている知識はいつでも引き出せます。そして全体の生命は、絶えず増加する理解力の頂点からながめられます。

人間は飛んでいる鳥の喜びを共にすることができますし、また生長して咲き出る草花の優美さや、その他宇宙の秩序整然たる有様を深く味わうこともできます。そしてそうするにつれて人間は次第に謙虚になり、自己がかくも完全な〝計画〟の一部であることに感謝するようになります。

宇宙の意識を通じての知覚力が身につくと生命が理解され、あらゆる現象は〝因なる意識〟の表現とみなされます。ゆえに忍耐強くまじめに探究して下さい。そうすればあなたは実際に自分を知ることになり、全体としての生命を知ることになるでしょう。

要　約

この講座の読者から私がこれまでに受け取った各種の報告によれば、多数の人が意識の知覚力の応用によって実際に奇跡を演じています。

記憶しなければならない事柄が一つあります。それは、意識は過去、現在、未来を通じて、如何なる惑星でも創造された物を通じて常に現われているということです。意識の中にこそさまざまのアイデアが生まれるからです。

神は常に存在し、それの創造から自然界に見られるような多くの物が発達しているのだと聖書に述べてあります。これらのアイデアは各種の目的のための青写真または原型として分類されますが、ただアイデアとしてのみ存在する限りそれは何の意味もありません。それを現象化せしめるには行為が必要です。

われわれが神と呼んでいる創造主は自身の意識の中にあるそのアイデアに気付いていたのですが、それを現象化せしめるのに宇宙の諸元素をさまざまの結合状態に応用しなければなりませんでした。しかるに諸元素は如何なる種類の物を作り出せばよいかを知るに足る知識を持ち合わさなかったので、現象化を引き起こすために必要な原型になるように言葉すなわち振動によって命令が与えられました。すると諸元素はその命令を受け入れるに充分な英知は持っていました。

創世記には最初の創造は〝空間〟であって、物はなかったと述べてあります。二度目の創造で物が現われ始めました。ここでわれわれは、創造主は力であるところの精霊に、すなわち諸元素中の英知にたいして命令または暗示を与えたことに注意しなければなりません。諸元素中にはその命令を遂行するための英知が存在する必要がありました。万物ばかりでなく人間がどのように創造されたかをあなたは聖書で読んだでしょう。一物体が果たして現象化するかどうかという疑惑は創造主の意識の中にはありませんでした。必ず現象化するという絶対的な確信があったからです。また、創造主の命令はくり返されなかったということに注意しなさい。それは一度だけ与えられたにすぎません。

われわれ各人の内奥に存在しなければならないのは右の種類の確信です。換言すれば「どんなアイデアが思い浮かぼうともそれは必ず実現する！」という絶対的な確信が各人の中になければならないのです。

人間は何をなそうともこの種の確信を持つならば、それは創造主が確信を持つことになるのです。創造主と共に行なうならば不可能な事はありません。

さて本講座の最初から復習してみましょう。先ずわれわれはアイデアを生み出す意識なるものを考えてみましょう。言い換えれば、何かを現象化しようと思う場合に、それを生み出す意識の能力は無限であるという確信と共に、その物事の意識的な青写真を持つのです。次にその青写真中のアイデアを捨てないようにし、

それを現象化せしめるのに言葉による命令が充分な確信と共に与えられねばなりません。意識はアイデアの作り手であることに注意しなさい。〝聖霊〟とは力と英知です。その〝息子〟が、意識の有していた原型の似姿を持つ現象で、これにより三位一体となるのです。これは、あらゆる生命体においては先ず意識があり、次に宗教界で言っている聖霊があり、その息子として現象があるということを意味します。

宇宙的な数学においては次のように言えます。「1プラス1は2ではなくて3である」右の二つの原理が正しく組み合わされるならば、3の数字に相当する現象が存在するからです。そしてこれはまた1に返ってゆきます。右の三つは一体となって完全な現象になるからです。

電球は光を生み出すのにプラスとマイナスの二つの原理を必要とします。子供を生み出すには男と女の両方が必要です。この法則によれば不可能な物事はありません。

意識とセンスマインドが等しい釣合を保って融合すれば、人間は自己の肉体を完全な健康状態に復元できます。それに成功するにはこの法則を用いればよいのです。（完）

【筆者（アダムスキー）あとがき】

〝生命の科学講座〟はブラザーズによって伝えられた知識です。それゆえこの世界を良き社会にしようとしている彼らブラザーズに協力する人はだれでも彼らからの援助を受けるでしょう。

だれかが団体を結成して、かなりうまく運営していると、他の対抗者がデマを飛ばして動揺を起こし、その団体を破壊しようとしたりした例がこれまでに少なからずありました。しかし恐れる必要はありません。なぜならグループ・スタディーやディスカッションの必要を感じている人は米国だけでも無数にいますし、各国にも沢山いるからです。ゆえにこの種の活動を（注。宇宙哲学の研究活動を）行ないたい方はいつでも新しいグループを結成して下さい。われわれが宇宙的な実をつみ取ろうとするのなら、宇宙の法則と共に生きなければなりません。

ブラザーズによって示唆された方法は次のとおりです。結成されたグループはこの講座で述べられた原理の研究と応用に努力して下さい。特に〝生命の科学〟講座の研究を目的として結成されたグループは宇宙の法則に従って行動し、あらゆる宗教、政治団体と関連なしに独自なグループとして活動して下さい。しかし啓発の目的をもって人間社会のあらゆる面に関心を持たなくてはなりません。建設的な分野で貢献し得る人をメンバーに加えるのは自由ですが、神秘主義を促進するような人は避けて下さい。われわれは事実を望んでいます。神話や神秘主義を望んでいるのではありません。われわれが神の似姿を現わそうとするならば、神のような生き方をする必要があります。万象は人間にとって自然のままで、しかも正常であるべきです。また、良き生活を望む十代の少年少女を激励しなければなりません。未来は彼ら若者たちのものであるからです。

GAP傘下のすべてのグループには折にふれて新しい情報をお送りします。あなた方に栄光のあらんことを！

ご案内

敬愛するＧＡＰ同志諸賢へ。今般ＧＡＰに〝宇宙研究同好会（略称ＵＤ）〟を新設することに決定いたしました。先のニューズレターでお知らせしました同会発足にたいして御賛同下さいましたことを心から喜びます。同会の発足は、基本的には十人近くのＧＡＰ誌友有志の意志に基づいているもので、このご案内はそれの意志表示として皆様に送られるものです。

四年前からすでに確立しているＧＡＰ内に敢えて更にＵＤを新設することになりました理由は、これまで誌友の大半が時間的経済的その他諸種の事情のため誌友間で実際に協力し合う余裕を持たなかった反面、誌友協力の必要性が最近漸次強くなり、これが一部誌友に痛感されてきた状勢にかんがみ、「知らせる運動」の性格を持つＧＡＰの誌友全部を糾合するのではなく、協力に多少なりとも余裕と意志のある誌友たちが連携して、余裕のない多くの同志にかわって宇宙理解の場を作る努力をする必要が生じていることにあります。

会の発展のために将来にたいする各種の準備をしてゆくことが大切ですが、その準備のうち、宇宙研究所を作る積立貯金をし、できるだけ近い将来に宇宙への理解に努力する人々の研究と憩いの場所を作る用意をしておくことは、この同好会で確保する、現実的に有効になる力であり、着実に準備されるならばいつかは実現する日がやってくることを確信することができます。

別紙の〝宇宙研究同好会の枝折〟を御覧になれば詳細がおわかりになると存じますが、会の基本的方針は会の進行を各期間ごとに当番が受け持って、その当番の判断で行なってゆくことにあります。各当番は殆ど何の制約もなしに自由に会を運営することができます。といってもメンバーはすべて多少とも宇宙への理解に素地のある人々ですから全く無秩序になるはずはありません。参加を御希望の方はハガキで〝宇宙研究同好会の枝折〟を御請求下さい。

動乱の唐代に憂愁を寄せた詩人、杜甫は詠んでいます。

手を翻せば雲となり手を覆せば雨　　粉々たる軽薄何ぞ数うるを須いん
君見ずや管鮑貧時の交りを　　この道今人棄てて土の如し

現代の世情に相通ずるものがあります。少なくとも私たちは管鮑貧時の交り（春秋時代の管仲と鮑叔牙のきわめて美しい友情）に劣らず、年令、性別、職業、地位などを超えて純粋な気持で交わり、宇宙への理解と私たちの真の成長とを期してお互いに力を出し合ってゆこうではありませんか。

日本ＧＡＰ　　久保田八郎

―編集後記―

◎一ヵ年（六回）にわたって連載された〝生命の科学〟講座も今回やっと完結しました。その間激励と賛辞を寄せられました方々に厚くお礼を申し上げます。ご承知のように本誌の発行は全くのワンマン・オペレイシュン（ただ一人でやる仕事）でありまして、翻訳、タイプ打ち、その他の仕事一切を私が勤務の余暇に行なっておりますので、発送が遅れがちとなり、ときにご迷惑をおかけすることを心苦しく思っておりますが、当方は精一杯の努力を続けておりますゆえ、事情をご賢察の上よろしくご了解のほどをお願いいたします。しかし今日まで続いてきましたのは全く会員各位の絶大なご支援の賜物でありまして、私は心から感謝しておりますが、昨年来物価の高騰で発行の資金も底をついてしまい、早急に対策を講ずる必要が生じてきました。もちろん私が赤字の脅威にさらされるのは私自身の精神状態や運営の手腕に起因することでありまして、だれからも同情を乞うべき筋合のものではありませんが、現段階の私の能力には限界がありまして、たとえば数万円の資金が急々に必要だという場合に、思念力によってただちにそれを眼前に出現せしめるほどの魔術的な力もなければ、そのような境地に達してもいませんので、「求めよ、さらば与えられん」の法則を応用することにしまして、ここにご喜捨のほどをお願い申し上げる次第です。いくばくでも結構ですからご寄付をいただければ発行も順調にゆくと思います。

◎〝生命の科学〟講座はたしかにすばらしい内容を有していたと思います。これを熟読して他に求道関係の書物は一切不要になったという方もありますし、予感力やテレパシックな能力を開発したという報告類が次々と寄せられていますが、これらはいずれ編集して掲載しましょう。拙訳のために意味不明の個所があったようでして恐縮しておりますが、今ここであらためて若干の注を付することにします。

【意識】Cosmic Consciousness　〝宇宙の意識〟ともいい、いわゆる〝神〟と同義で、イエスの言う〝天の父〟がこれに相当し、〝創造主〟の別名でもあり、またアダムスキーの言う〝宇宙の因〟とも同じです。人間の内奥には絶対的なものとしてこの〝意識〟が存在しているけれども一般人はそれに気付かないというわけです。気付いたならばそれを〝意識的意識〟といいます。とにかくア氏の言う意識は一般で使用されている「意識」という語の意味とは異なります。

【センスマインド】sense-mind　人間個々が持つ〝心〟の意味であって、くわしく言えば〝感覚器官の心〟です。また〝肉体の心〟とも言えます。すなわち、物欲、憎悪、怒り、嫉妬、その他の分裂感を起こすのがこのセンスマインドです。一般人はこのセンスマインドだけで生きているというわけで（というよりもセンスマインドが現象界に振り廻されていて）、いわば一種の睡眠状態にあると言えるのだそうです。そこで目覚めるには内奥の意識とこのセンスマインドとを融合せしめることが必要で、それがテレパシーの能力を開発したり難病を奇跡的に治して健康体に復せしめたりするための基礎となるわけです。右の意識もセンスマインドもアダムスキー独自の用語であって一般の文献には出てきません。一体にア氏の文章にはこうした造語が多く、翻訳には苦

心します。原文の文体は少々古めかしくて、修辞的な技法は一切抜きにしてあります。つまり思っていることを淡々と述べているだけで、軽妙な筆致というようなものではありません。いささか重厚な感じがしますが、これは彼の人柄や年令のしからしむるところでしょう。私の訳文はかなり平易なくだけた文体にしてありますが、これは考えがあってのことです。

【印象】Impression 心中にわき起こる〝感じ〟の意味であって、ア氏の文章では大体にテレパシックな感受の結果を表わします。

アダムスキーの言う「意識とセンスマインドの融合」ということを単なる抽象的な言辞にすぎず、そんなことは日常生活とは何の関係もないことだとお考えになる方があるかもしれませんが、ア氏の理論を生活に応用して現実に各種の奇跡を起こした人が米国には沢山いるという事実からみても、何らかの意義を含んでいることはたしかです。しかしそれにしても実行となると容易ではありません。四六時中「意識と一体である」という〝意識的意識〟を保ち続けるのは私にとってはラクダが針の穴を通るよりも困難でして、これについてはただ概念的に漠然と考えているだけではダメで、何らかのきびしい方法を講じることが必要となってきます。あれこれと考えてはいますが、どなたかよい方法をご存知でしたらご教示下さい。

◎〝死と空間を超えて〟と題する手記は、一九六一年三月末にア氏から各国GAPへ送られた長文の書簡で、当時は事情あって公表されなかったのですが、今回やっと発表に至ったものです。この内容に関してア氏宛に直接質問状をお出しになりましても彼が多忙のために返事は来ませんから、その点をお含みおき下さい。

◎アダムスキーはこれまで私にたいして全く親切な態度を示してきました。私は彼にたいして殆ど何らの経済的な援助もしていないのに、彼はあらゆる郵便物をすべて航空便でよこし、常に力強く温かい激励の言葉を寄せ、貴重な情報類を惜しげもなく提供し、しかも一銭の金も要求したことはなく、その態度は終始誠意でもって貫かれていて、あくまでも真実を伝えようという熱意に燃えていました。この彼の気高い精神を私は心から賛美しますと共に、人間関係の不思議さをあらためて感ずる次第です。

◎UDは着々と準備が進行中です。ふるってご参加下さい。

◎お手紙やテープ類を歓迎します。どしどしお寄せ下さい。

＊　＊　＊　＊

◎本号より左記のとおり誌代値上げのやむなきに至りました。一部送料共一五〇円となりますので、ご了承下さい。（久）

日本GAPニューズレター　1965 — 3月・4月号

翻訳編集発行人　久保田八郎

発行所　日本GAP
島根県益田市益田古川
振替・松江　二六三〇
（久保田八郎個人名義）

通巻第27号

昭和四十年
四月十日発行
—隔月刊—

頒価一三〇円・送料二〇円
☆一ヵ年分送料共九〇〇円